



デフリンピックから学ぶ 目に見えにくい「聴覚障害」について

校長 博多 正勝

「4年に一度のオリンピック」は誰もが知る世界大会です。オリンピックと同じ年に開催される「パラリンピック」は障害者のための大会として、よく知られています。本校も車いすラグビーの日本代表試合を観戦したり、西原小学校に来ていただいたりと、交流も盛んです。

さて、今年の11月から「デフリンピック」が東京で開催されます。デフ（Deaf）とは、英語で「耳がきこえない」という意味です。デフリンピックは「聞こえない・聞こえにくい人のためのオリンピック」です。デフリンピックの歴史は古く1924年からフランスで開催され、今回のデフリンピックは100周年の記念すべき大会であり、日本では初めての開催になります。東京開催とのことから、東京都が学校観戦を進めており、本校も4年生が代表として応援に行く予定です。種目や日時が決まりましたらお知らせします。（デフリンピックの詳細はリンクをご覧ください）

<https://deaflympics2025-games.jp/#gsc.tab=0>

ただ、デフリンピックは、オリンピックやパラリンピックに比べてどうしても認知度が低いです。様々な理由があるとは思いますが、聴覚障害は他の身体との障害と比べて、目に見えにくい面があると思います。以下の記事を紹介します。

国立障害者リハビリセンター 国リハニュース 313号 平成21年11月

巻頭言（抜粋） 病院副院長 田内 光

聴覚の障害は「目に見えない障害」であると言える。それは彼らの障害は見ただけでは判断しがたいからである。～抜粋～しかしこの事は、聴覚障害者にとって別の面で非常なマイナス面を持っている。それは他の人からは聴覚障害者とは分からず、そのハンディキャップを認知してもらえない事である。したがって聴覚障害者への支援なども、他の障害ほど目立たないので後回しになりがちである。この点で「目に見えない障害」であることは、聴覚障害者には非常に大きなマイナスとなっているのではと感じる。（同センターHPリンク <https://www.rehab.go.jp/>）

私自身のことになりますが、子供の時から聞き取りに不自由さを感じておりました。ただ、聴力はそれほど悪くはありません。40代後半になって受診した耳鼻科で「APD（聴覚情報処理障害）」と診断されました。簡単に言うと、音としては聞こえていますが、言葉としての理解に課題がある、脳の認識処理の課題です。最近ではAPDではなく「LID（聞き取り困難）」とも言われています。具体的には、騒音下や後ろからの話、相手の話すスピードが速いと聞き取りに困りが出てきて、どうしても聞き返しが多く、時には分かったふりをしてしまうことも時にはあります。この診断が降りてからは、職場の方や子供たちに話をし、理解を求めるようにしています。それによって、仕事や生活が楽になりました。自身の障害に向かい合うようになってから、手話を学ぶようになり、同時に聴覚に不自由を感じている方との関わりも増えてきました。その中で、先ほどの田内副院長の言葉のように「自分は困っているけれど分かってもらえない辛さ」を、聴覚障害をもっての方が多くいることを知る機会を得ました。同じ思いがあることも。

学校生活に話を戻します。子供たちは日々の学習や生活を「音声言語」に頼っています。ただし、先ほどの話のように、音声言語だけでは学習や生活に困難を抱えている子も必ずいます。これは、聴覚に関することだけでなく、困り感の子供たちそれぞれです。学校としては、音声言語中心の一斉授業ではなく、視覚情報も大事にした学びを進めていきます。また、ICT機器は情報が画面上ですぐに流れていってしまう面もあるため、どの子も授業の学びを適切に振り返りができる「教師の板書技術の向上」や「ノート指導」も大切にしていきます。同時に子供たち自身が自分の困り感を理解し、周りに丁寧に伝えていける、それを周りの子たちも思いやりをもって受け止めていける良好な関係づくりを、学級・学年等を柱として行っていきます。「学びの主役は子供たち」です。9月以降も子供たち自身がより、探究的な学びを友達と協力し合って創り上げていけるよう、学校経営を進めていきます。お子さんの件で何か気になることがありましたら、学校までご連絡ください。一緒に作戦会議をしましょう。今後ともご協力のほどお願いいたします。